第２学年　総合的な学習の時間　学習指導案

草津市立老上中学校　杉浦　裕美

１　単元名　三方よしの精神で地域とつながる ～ヨシを活かした出店企画と ESD の実践～

２　単元の目標

○地域資源であるヨシを活用した商品企画・出店活動を通して、自ら発信することができる。
（知識・技能）

○「三方よし」の精神（世間よし・琵琶湖よし・みんなよし）を体験的に理解し、地域・環境・社会とのつながりを考えることができる。（思考・判断・表現）

○より多くの人に琵琶湖の素晴らしさを知ってもらいたいという目的意識をもち、解決する方法を見つけるうえで、他者と協働したり、他者の意見や考えを受け入れたり、反論したりすることができる。
（主体的に学習に取り組む態度）

３　単元について

（１）教材観

地域資源として活用されているヨシ（葦）を中心に据えた探究的な学習活動を通して、生徒の主体的な学びと社会参画を促すことを目的としている。ヨシという身近な自然素材を教材化することで、環境保全・地域振興・文化継承といった多面的な学びを実現している。

教材としてのヨシは、地域の歴史・文化・環境と深く結びついた「生きた教材」である。生徒が自らヨシを刈り取り、加工し、発信する過程を通して、知識の習得だけでなく、課題発見・解決能力、コミュニケーション力、創造力などの汎用的能力が育まれる。

また、ヨシを通して行政や企業、地域住民と連携するなど社会とつながることができる。生徒が自らの学びを社会に還元し、地域の未来を担う存在として成長することができる。

本単元は、持続可能な社会の構築に向けた教育のあり方を示すものであり、地域に根ざした実践的な学びを通して、生徒の「生きる力」を育む単元である。また、関係者の方々とのコミュニケーションを通して、人とのつながりの大切さ、温かみを感じることができるとともに、コミュニケーションスキル、ソーシャルスキルの向上を図ることができる。

また、地元滋賀県、草津市に誇りを持ち、地元愛の醸成を図るとともに、これからの人格形成において自己のアイデンティティ確立の糧にすることができる。

（２）生徒観

本学年の生徒は、１年生時に校外学習の一環として、琵琶湖畔に位置する琵琶湖自然体験学習施設「オーパル」を訪問し、カヌー体験やヨシ笛作りを通して、琵琶湖の大きさを間近に体感するとともに、琵琶湖に生息する動植物、特にヨシについての学習をしている。そして、この体験学習をきっかけとして、総合的な学習の時間に琵琶湖について、クラス別・班別にそれぞれテーマを設定して調べ学習を行い、みんなが初めて知ることになる新しい情報、調べたことで見つかった課題やその解決に係るアイディアや意見を、各学級で発表している。また、琵琶湖保全に係る方々をはじめ、ヨシ業者等の関係者の講話を通して琵琶湖のヨシに関する課題を知り、実際にヨシ刈りを体験することで、地域の環境問題に対する関心を高めた。２年生では自分たちで刈り取ったヨシを活用して葦簀（よしず）を作成し、教室内の室温変化を調べる実験を行った。このような体験的な学びを通して、環境保全の意義や地域資源の活用方法について、学びをさらに深めることができている。このような継続的な取組を通し、生徒は発信力・対話力・創造力・課題解決力を身につけている。活動は単なる学校行事や思い出づくりではなく、地域の一員としての誇りと責任感を育む教育的実践である。

卒業後も、総合的な学習の時間を通して培った力を最大限に発揮し、滋賀・琵琶湖の魅力を自らの言葉で語り、他府県や世界の人々に伝えられる大人へと成長していくことを期待している。

令和７年５月実施「総合的な学習の時間アンケート」の結果より、「まわりの人と協力した」「解決したい課題をつくる」「自分の考えや気持ちを伝えた」の項目で市平均よりも２％以上高くなった。生徒が計画を立て、まわりと協力し、じっくり考え、発表・発信する学習をすすめたことにより、主体的・協働的な学びが行われ、自己肯定感や学習への充実をより感じるようになったということがわかった。

（３）指導観

本単元の指導にあたっては、生徒が地域の課題解決に主体的に向き合い、実社会とつながる学びを通じて生きる力を育むことを重視する。生徒から出された意見をもとに活動内容を構築し、すべての取組は生徒主体で行う。教師は、生徒が自ら問いを立て、調べ、考え、発信するプロセスを尊重し、伴走者として支援する立場をとる。

（４）ＥＳＤとの関連

・本学習で働かせるＥＳＤの視点（見方・考え方）

相互性…ヨシ群落が琵琶湖の生態系維持に大きな役割を果たしている。
有限性…何もしなければヨシ群落はなくなっていってしまう。
責任性…ヨシの魅力を知ってもらう、自分たちが進んで行動していくことが大切である。

・本学習を通して育てたいＥＳＤの資質・能力

多面的・総合的に考える力
ヨシの保全・活用について理解し、他者へどのように発信するかを考える力。
コミュニケーションを行う力
対話を通じて自分自身の考えを深め、他者との協働だけでなく、「伝える力」や「聴く力」「受け止める力」「つなげる力」を伸ばす。
他者と協力する態度
同世代の仲間との協働だけでなく、行政関係者、企業担当者、地域住民、さらには著名人との対話を経験し、多様な立場や価値観に触れ、自ら積極的に行動できる力。
進んで参加する態度
マザーレイク琵琶湖を誇りに思い、大切にしていくために、積極的に行動に移す。

・本学習で変容を促すＥＳＤの価値観

世代間の公正
琵琶湖、ヨシの課題だけでなく、活用の仕方、素晴らしさや魅力を私たちが伝えていく責任がある。
自然環境、生態系の保全を重視する。（生物多様性の重視）
琵琶湖の自然環境、生態系のバランスを維持するために私たちにできることがあるという自覚を持ち、郷土愛の醸成を図る。

・達成が期待されるＳＤＧｓ

すべての人に健康と福祉を（３）
産業と技術革新の基盤をつくろう（９）
住み続けられるまちづくりを（１１）
気候変動に具体的な対策を（１３）
安全な水とトイレを世界中に（６）
人や国の不平等をなくそう（１０）
作る責任、使う責任（１２）

４　単元の評価規準

(ｱ)知識及び技能	(ｲ)思考力・判断力・表現力等	(ｳ)主体的に学習に取り組む態度
① ヨシの課題や活用など様々な知識について理解している。 ② 学んだり、調べたりして獲得した知識を用いて、それらを関係づけながらまとめる技能を身につけている	① 資料をもとに「ヨシ」の素晴らしさを広げるための方策を考えている。 ② 学んだことや他者の考えをもとに、自分の考えをまとめている。	① 広く多くの人に「琵琶湖」や「ヨシ」のよさを知ってもらいたいという目的意識を持ち、意欲的に活動に参加しようとしている。 ② 環境を守ることの必要性や課題等に触れ、「琵琶湖」や「ヨシ」の良いところを多くの人に知ってもらうために、どのようなブースにすればよいか発信しようとしている。

５　単元の指導計画（全８時間）

学習活動	○学習への支援	評価備考
1 1年生時に学習した「琵琶湖」「ヨシ」の魅力や課題を振り返る。 ・マザーレイク「琵琶湖」をよりよい状態でたくさんの人や次世代へとつないでいく必要があることを認識する。 ・「ヨシ」の認知度を上げるためにはどのようにすればよいか考える。	○「琵琶湖」が私たちの生活に深い関わりがあることを思い出させる。 ○「ヨシ」にはどのような課題や保全、活用があったか思い出させる。	ア① （知技） ウ① （思判表） １時間
2 ・滋賀県で一番多くのお客さんがくるイベントや場所は何かを調べさせる。 （イナズマロックフェス） ・イナズマロックフェスで滋賀をPRするブースがあることを知らせる。 ・過去のフェスの内容や、滋賀体感ブースの一覧を見る。 ・過去の滋賀体感ブース一覧を見て、自分ならどこのブースに行きたいか、なぜ行きたいのかを考える。協働学習ソフトで提出する。 ・班内でし合う。 ・班内ででた意見をクラスで発表、共有する。	○各地域でのお祭りやイベントなど知っているものをあげる。タブレットを使用し検索する。 ○イナズマロックフェスのコンセプトや過去の来場者数、フェスの写真などをみて感じたことを発表させる。 ○なぜ行きたいのかを理由を考えさせる。 （おもしろそうだから、なんとなくはではなく、具体的な理由を持たせるよう、はたらきかける。）	ア①②（知技） イ①②（思判表） ウ①（主体的） １時間
3 ・2次で出た意見を振り返る。 ・共通点は何かを考える。 ・共通点をもとに、自分たちがブースをするならば、どのようなブースにするかを個人、班で考える。	○共通するキーワードを導く ○「どのようにしたら『ヨシ』について、多くの人に広く知ってもらうことができるか」という問いを持たせて取り組ませる。	ウ① （主体的） １時間
4 ・班で出た意見をスライドにまとめる。 ・どのような発表が聞き手の興味関心をひくものになるか考える。 ・自分たちが紹介する「ヨシ」の魅力を伝えるための工夫を考える。	○対象とする年齢、体験のルールや料金、運営方法、必要な材料など現実的に考えさせる。 ○発表するのに際し、聞き手に伝わるようにするために大切なことはどのようなことか、各班で考えさせ、繰り返し練習をさせる。	ウ① （主体的） ２時間
5 ・作成したスライドを活用して、各クラス、各班でプレゼンテーション行う。 ・自分たちの考えやアイディアをうまく伝えることができるようにする。	○発表者への質問時間を設け、自分たち思いや考えを即興的に言えるようにする。 ○各クラスで出た意見の中から絞って、自分たちがもっとも伝えたいことを強調できるように支援する。 ☆各クラスで出た意見をもとに学級委員で検討決定する。	ウ② （主体的） ２時間
6 ブース準備・活動の振り返り ・「ヨシ」に関連する学習を来年度も引き続き取り組んでいく。 ・商品開発に向けて、学習を続けていく。	○他教科でも「ヨシ」についての学習がある。すべての授業が総合的な学習の時間につながっていることを押さえる。	ア①（知技） イ②（思判表） １時間

６　補足

各クラスで出た意見を集約し、取組をポスター展示、ヨシについてのクイズラリー、自分たちが編んだヨシ簀を展示しヨシ簀の効果（涼しさ等）を体験できる休憩所を企画した。クイズラリー参加者へのプレゼントとして、数量限定でヨシとペットボトルキャップを使用したオリジナルキーホルダーに決定した。ペットボトルキャップキーホルダーの制作にあたり、全校生徒の協力のもと約 1000 個のペットボトルキャップを回収した。この活動は、SDGs および MLGs の視点から、資源循環の重要性と環境保全に対する意識の向上を目的として実施した。キャップの再利用を通して、「つくる責任・つかう責任」ゴールや「海の豊かさを守ろう」ゴールといった目標への理解を深めることができた。また、MLGs の理念に基づき、琵琶湖と人との関係性を再認識し、持続可能な暮らしのあり方を考える契機になった。さらに、キーホルダー制作に使用しなかった余剰のキャップについては、発展途上国へのワクチン支援に活用するため、回収団体へ寄付を行った。これにより、地域内の資源循環だけでなく、国際的な社会貢献にもつながる活動となった。ペットボトルキャップキーホルダー制作にあたり、技術科のニッパーやはんだごて、家庭科のアイロンの使用方法や注意点などを学習し、実技教科との関連を図った。

そして、9 月 20，21 日に開催された「イナズマロック 2025 おいで～な滋賀体感ブース」に出店を行った。2 日間で総勢約 700 名が本校ブースを訪れられ、代表生徒 15 名がヨシや本校の取組について解説を行った。アンケート結果から、来場者はヨシに関する新たな知識を得るとともに、環境問題への関心を高める機会となった。来場者の多くが「ヨシが食べられること」「紙やお菓子に活用できること」「水質改善や温暖化防止に貢献すること」など、これまで知らなかった事実を学び、驚いた、感動したという感想を得た。また、生徒による解説やクイズ形式の展示が丁寧だったと好評で、学びの楽しさと分かりやすさが評価された。来場者からは「行政や企業との連携による継続的な取組の必要性」や「県下での普及による経済的メリット」などの意見も寄せられている。この活動は、ヨシの環境的価値だけでなく、経済的・社会的な可能性にも目を向ける契機となっており、さらに、展示を通して「自分もできることをしたい」「ヨシのある地域を調べてみたい」といった声が上がっており、来場者の行動変容を促す効果も確認された。

「滋賀・琵琶湖の良さを滋賀県に住んでいる方以外にも伝えることができた」という声があり、滋賀・琵琶湖の自然や文化の価値を再発見し、地域に対する誇りを育むことができた。「自分の住んでいる地域から環境問題解決にむけてできることがあることを知った」という感想は、環境問題に対する関心が、より主体的な行動へとつながっており、学びが“自分ごと”として定着している証となった。さらに、「もっとヨシの魅力を沢山の人に知ってほしい。そのために自分たちから発信していきたい」という言葉には、情報発信への意欲と責任感が表れている。単なる知識の習得にとどまらず、「ヨシについて知ってもらうことがゴールではない。利活用するシステムができるまでがゴールだ」と語る生徒もおり、課題解決に向けた本質的な視点を持ち始めている。加えて、「様々な年代の人と話をすることで、対話が楽しくなった。自分自身の成長につながった」という感想からは、世代を超えた交流が生徒のコミュニケーション力や自己理解を深める貴重な機会となった。これらの感想は、探究的な学びやアントレプレナーシップ教育の成果として非常に意義深く、今後の教育活動においても大きな一歩となった。

アイロンやはんだごての使用方法を学習

『夢をのせた鳥　輝く結晶』
西の湖賞を受賞